第45回身心変容技法＆世阿弥研究会＆ワザ学・こころ観研究会

【日時】2016年2月15日（月）17時～19時

【場所】京都大学稲盛財団記念館2階225会議室

【発表】奥井遼（日本学術振興会海外特別研究員・パリ第5大学）

　　　「遊びと学びーサーカス学校のアーティスト養成の冒険」

　　　司会：鎌田東二　発表60分＋討議60分

* 国立サーカス学校（CNAC：CentreNationaldesCircus）
* プロのサーカシアンを養成する（トランポリン〜
* 文化省管轄（教育機関+α）
* バカロレア以降、職業への結びつき
* フランスは「普通科」が多い日本とはちがい、将来のビジョンを描きながら学ぶ
* 「現代サーカス」とは？（1970年代〜、フランス・カナダ、ベルギー、イギリスなど）
* フランスサーカスの危機、サーカス学校の設立

　Ex. CNAC（1984年）、ENCAR（1986年）

* 「サーカスはアートである」（Jaque Lang）

＝“**演出**”が鍵（⇔伝統的サーカスは「技巧」が鍵：動物、ピエロ、オートバイ

* 身体性を駆使して「競技」ではなく「表現」へ
* フランスの場合、日本のように身体能力が優れている＝オリンピック、ではなく、身体の可能性がサーカスのような「表現」に行く

 　・ダンス、演劇、アクロバット、音楽など、領域を超えてコラボする表現

* 超絶テクニックを魅せるというより、色々なわざ・風景の組み合わせ、響き合い◎

Ex.「カメレオンの叫び」第９期生卒業講演

→混ぜこぜ要素で魅せるコンテンポラリーサーカス

* 円形の舞台・テントの使用・危険、冒険、挑戦・キャラバンによる暮らし（※昔は旅暮らし）
* 巡業・辺境・聖性
* 芸能者は普段は社会の外側に追いやられ排斥されているが芸の空間になると立場が逆転し「聖」になる。日本芸能ではこの逆転が根強いが、フランスは社会の「外」を認めない国で文化政策の力がすごい。＝芸能の土着の部分が「洗練」されコンセプチュアルになりがち（伝統と古典の問題：フランスの「traditional」は東南アジアなど異郷を指し、自国の伝統は「古典＝クラシック」と呼ぶ）cf.「伝統と古典の問題」渡邊守章
* 身体的に異次元を生きることについて、「現象学的身体論」

・その場で現象することを拾って組み込む　 Ex.27期生は得意な音楽を入れた

* 東洋は「呼吸」（コントロールできる）、西洋は「鼓動」（一定）（cf. 武智鉄二）
* サーカスの身体＝むき出しの身体性
* フランス哲学が前提としてきた身体＝intellectualな身体（段階説的、右肩上がりに着々と「できる」ようになる身体）cf.Dreyfus(2002)⇔ブレ、生々しさを伴う身体へ着眼
* メルロ−ポンティ（1945）「習慣とは、新しい道具を自分に附加することによって我々の世界内存在を膨張させること、ないしは実存の在り方を変えることの能力の表現である。」（身体の動きには毎回限界がある、動きにより世界の在り様とともに編み直される身体性、色んな見え方、視点を含みつつ「襞」の多い動き○）

Cf. 「ロープ」使い…ロープが身体になる、「私」が人間ではなくなる、もがくなかで発見的に自働化されていく「美しい」動き＝「美しさを考え直すのも僕たちの仕事」byサーカスの先生

○　現代サーカスは「テクニック(technique)」ではなく、「アート(arts)」である。

　・「遊び」（＝一番効果的に能力を引き出す）がベースとなっている（その余韻のなかで創作、シンクロ能力がめばえる）

Cf. 休みの午後に公園で自由に即興的に

　動き・世界　　　　　　　　　　遊び～限界・突破　　　　　　　　　　　動きα・世界α

* 「遊び」が試行錯誤を包むことでその都度の「限界」が突破し続けられる
* 「パリ第五大学」という場所＝哲学的人間学が可能なスポーツ学部（健康・スポーツ・身体性について考える場所）

コンテンポラリーな身心技法研究の場としておもしろい

（斬新な身体的在り様を見据える、表現の極限を超える、人間的枠組みを超える≒狂気）

【人間はどのようにして変容するのか？？人格転換/人生転換】

＝討議＝

* 瞑想によるアフターエフェクト（「自己感」の変容、無我、思い通り）についての問い

達人は「無心」でいながら還ってくる

○体験的理解の事柄を、根本的に身体図式が組直され全体的に変化するなか、どのように語るか（【事後の悟り】【最適解】）

○技巧、技術の力（アジア的）⇔コンセプト・ルールを作り遊ぶ・ひらめく力（フランス的）

「うまい/下手」の枠組みではなく、事象を命題的に宙づりにして哲学的に揺さぶるアピール力